

動作性述語タイプの連体修飾節のテンスについて ——基準時の選択を中心に

翟 雯 茜*

The tense criterion of attributive clauses-----focused on action predicate

Wenqian Zhai

Japanese major students always have doubts about how to ascertain the tense of attributive clauses. It is different from the tense decision of a simple sentence for it is also associated with the tense of main clauses, the tense of the speaking time, etc. This research is made to clarify the relationship among the tense of attributive clauses, main clauses and the speaking time. With tens of example sentences extracted from novels and newspapers, the conclusion is anticipated to offer help of how to choose the tense criterion of attributive clauses.

1 はじめに

現代日本語のテンスの問題をめぐって、諸学者によって様々な観点から優れた研究が行われている。近年、語用論、ディスコース論、テキスト言語学といった形で、テンス・アスペクトに関心が集まっている。その中で、連体修飾節のテンスの問題は、特に複雑な問題である。それは、連体修飾節のテンスがひとえ文のテンスに見られない複雑な様相を呈するからである。

ひとえ文では、当然のことながら、テンスの基準時は発話時現在であり、タ形は発話時以前つまり過去を表し、基本形は発話時以降または同時、つまり未来または現在を表す。丹羽はこれを絶対テンスと呼ぶのである。連体節においては、発話時を基準にし得るとともに、主節時を基準にすることもできる。後者は相対テンスと呼ばれる。例えば、

今晚のパーティーに使う小道具を買った。

その日は、翌日のパーティーに使う小道具を買った。

前者の「使う」は未来を、後者の「使う」は主節時（「買った」時点）以降を表す。また、

明日、アメリカに住む娘が連絡をくれるだろう。

あのごろは、アメリカに住む娘が連絡をくれた。

前者の「住む」は現在を、後者の「住む」は主節時（「連絡をくれた」時点）と同時を表す。

絶対テンスと相対テンスの場合を合わせると、「タ形は基準時以前を表し、基本形は基準時以降または同時を表す」とまとめられる。重要なことは、タ形、基本形という述語その

* 教養部

ものは、発話時を基準とするか主節時を基準とするかということを特に指定しないということである。

テンスの対立がル形とタ形の対立によらずとして、連体節のテンスには、主として、発話時との時間関係を表す場合(発話時基準、絶対テンス)と主節時との時間関係を表す場合(主節時基準、相対テンス)がある。では、ここにおいて、基準時の選択の問題が生じてくる。つまり、どういう場合に発話時基準になり、どういう場合に主節時基準になるか。本文は、この問題を考察しようとする。

2 基準時の選択について

以下、例えば連体節がル形で主節がル形というのを<ル形ール形>と表示する。形式上の組み合わせは、<ル形ール形>、<タ形ール形>、<ル形ータ形>、<タ形ータ形>の四つがあることになる。また、例えば連体節と主節との時間上の前後関係において、連体節が主節に先行する場合を<連体節→主節>、その反対を<主節→連体節>、同時の場合を<従属節＝主節>と表す。

a. <ル形ール形>

テントを借りる人は、(事前に／後で)使用料を払ってください。

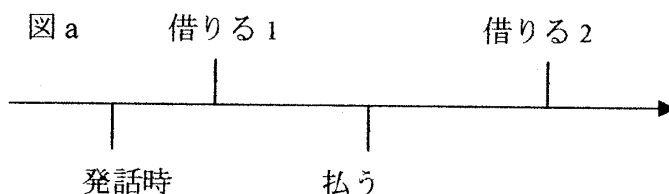


図 a のように、<ル形ール形>の例文を時間的意味から分析すると、いずれも<発話時→主節時>の順序であるが、連体節の発生時間は二つの可能性がある。一つは、<発話時→連体節(借りる 1)→主節時(払う)>という順序になることもあり得るが、もう一つは、<発話時→主節時(払う)→連体節(借りる 2)>という順序になることもありうるのである。ここで、「借りる 1」は「後で使用料を払う」という状況を表し、「借りる 2」は「事前に使用料を払う」という状況を表すのである。そのなかで、「借りる 1」の状況は発話時以降主節時以前に位置するから、この連体節の「ル形」は必ず発話時基準のとりしかできないのである。「借りる 2」は主節時以降に位置するから、発話時基準を取ることと主節時基準を取ることのどちらでも可能である。

b. <タ形ール形>

テントを借りた人は、使用料を払ってください。

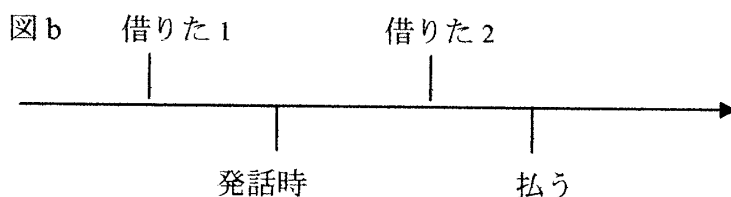


図 b のように、<タ形ール形>の例文を時間的意味から分析すると、いずれも<発話時→主節時>の順序であるが、連体節の発生時間はやはり二つの可能性がある。一つは、<

連体節（借りた 1）→発話時→主節時（払う）＞という順序になることもあり得るが、もう一つは、＜発話時→連体節（借りた 2）→主節時（払う）＞という順序になることもありうるのである。そのなかで、「借りた 2」は発話時以降主節時以前に位置するから、当然ながら、連体節の「タ形」（「借りた 2」）の基準時は主節時基準である。ところが、「借りた 1」は発話時以前であるから、論理的に見ると、こういう状況は発話時基準をとっても、主節時基準をとってもありうるのである。

c. <ル形ータ形>

テントを借りる人は、使用料を払いました。

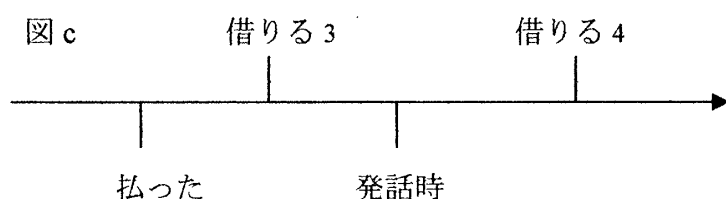


図 c のように、<ル形ータ形>の例文を時間的意味から分析すると、いずれも＜主節時→発話時＞の順序であるが、連体節の発生時間はやはり二つの可能性がある。一つは、＜主節時（払った）→連体節（借りる 3）→発話時＞という順序になることもあり得るが、もう一つは、＜主節時（払った）→発話時→連体節（借りる 4）＞という順序になることもありうるのである。そのなかで、「借りる 3」は主節時以降発話時以前に位置するから、当然ながら、連体節の「ル形」を取る基準時は主節時基準である。ところが、「借りる 4」は発話時以降であるから、論理的に見ると、こういう状況は発話時基準をとっても、主節時基準をとってもありうるのである。

d. <タ形ータ形>

テントを借りた人は、（事前に／後で）使用料を払いました。

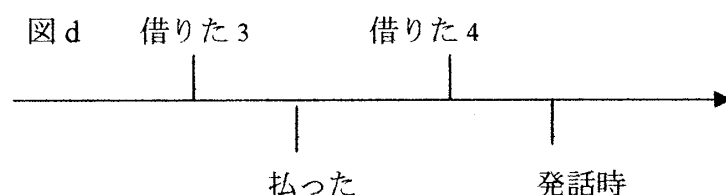


図 d のように、<タ形ータ形>の例文を時間的意味から分析すると、いずれも＜主節時→発話時＞の順序であるが、連体節の発生時間はやはり二つの可能性がある。一つは、＜連体節（借りた 3）→主節時（払った）→発話時＞という順序になることもあり得るが、もう一つは、＜主節時（払った）→連体節（借りた 4）→発話時＞という順序になることもありうるのである。ここで、「借りた 3」は「後で使用料を払った」という状況を表し、「借りた 4」は「事前に使用料を払った」という状況を表すのである。そのなかで、「借りた 4」は主節時以降発話時以前に位置するから、当然ながら、連体節の「タ形」を取るのは発話時基準である。ところが、「借りた 3」の状況は主節時以前であるから、論理的に見ると、こういう状況は発話時基準をとっても、主節時基準をとってもありうるのである。

以上をまとめてみると、ル形は基準時以降、または基準時と同時を表し、タ形は基準時以前を表す。つまり、発話時を基準時とするか主節時を基準時とするかということは、ル形・タ形そのものとしては特に指定しないと考える。ル形は発話時以降・同時、主節時以降・同時どちらを表し得、タ形は発話時以前、主節時以前どちらも表し得、かつ、ル形とタ形の組み合わせによって、ル形・タ形がそれぞれ発話時基準として表し得る範囲、主節時基準として表し得る範囲が、論理的に決まる。

論理的に決まるというのは次のようなことである。ル形が発話時と同時・以降または主節時同時・以降を表し、タ形が発話時以前または主節時以前を表すということを、ル形とタ形の四つの組み合わせにそれぞれ当てはめると、ル形・タ形がそれぞれ発話時基準・主節時基準で表し得る判事というのが、次のように決まる。

a.<ル形ール形>の組み合わせでは、<発話時→主節時>という順序であるから、発話時及び発話時以降主節時以前の事柄は必ず発話時基準で表され、主節時及び主節時以降の事柄は発話時基準でも主節時基準でも表され得る。

b.<タ形ール形>の組み合わせでは、<発話時→主節時>という順序であるから、発話時及び発話時以降主節時以前の事柄は必ず主節時基準で表され、発話時以前の事柄は発話時基準でも主節時基準でも表され得る。

c.<ル形ータ形>の組み合わせでは、<主節時→発話時>という順序であるから、主節時及び主節時以降発話時以前の事柄は必ず主節時基準で表され、発話時及び発話時以降の事柄は発話時基準でも主節時基準でも表され得る。

d.<タ形ータ形>の組み合わせでは、<主節時→発話時>という順序であるから、主節時及び主節時以降発話時以前の事柄は必ず発話時基準で表され、主節時及び主節時以前の事柄は発話時基準でも主節時基準でも表され得る。

これを、主節が未来の場合、過去の場合にまとめてみると、つまり<発話時→主節時>のaとbを組み合わせ、<主節時→発話時>のcとdを組み合わせると、次のようになる。主節が未来の場合は、主節時及び主節時以降の事柄はル形によって発話時基準としても主節時基準としても表され得、発話時及び発話時以降主節時以前の事柄は発話時基準のル形か主節時基準のタ形かいずれかによって表され、発話時以前の事柄はタ形によって発話時基準としても主節時基準としても表され得る。

主節が過去の場合は、発話時及び発話時以降の事柄はル形によって発話時基準としても主節時基準としても表され得、主節時及び主節時以降発話時以前の事柄はル形によって発話時基準のタ形か主節時基準のル形かいずれかによって表され、主節時以前の事柄はタ形によって発話時基準としても主節時基準としても表され得る。

3 ルールの検証

以上は連体修飾節の基準時の選択について論じたのである。しかし、現実には、基準時の選択はどちらかに制限されたり優先されたりすることはある。また、発話時基準としても、主節時基準としても表され得るというのも、多くの場合、文中のほかの要素や文脈に

よって、一方が前面に出、他方が背後に下がる。例えば、dに副詞を付加して、

a おとといテントを借りた3人は、きのう使用料を払いました。

b その前日にテントを借りた3人が、当日使用料を払いました。

aは発話時基準、bは主節時基準が前面に出ており、aが主節時以前を表すという面、bが発話時以前を表すという面は背後に退いている。

これからは『雪国』の例文に対する分析を通じて、現実基準時の選択に影響を与える要素を究明しようと思う。丹羽哲也は、いくつかの制約を挙げたのである。例えば、「連体節の事柄と主節の事柄との順序、ル形・タ形のアスペクトとしての性格、発話時と主節時という基準時の性格、過去と未来の性格の違い」などが挙げられるが、ここでは、小説で取った例文をあわせて、基準時の選択にもっとも影響を与える要素、「連体節の事柄と主節の事柄との順序」を分析することにする。

従属節と主節の前後関係が決まっている場合、それに反する組み合わせは排除される。

この制約は当然のものであるが、これによって制約を受けることは非常に多い。次の例は、<従属節→主節>という順序が事柄として決まっており、それに反する組み合わせは当然ありえない。例えばaでは発話時基準であれ主節時基準であれ「撮る」が「送る」以降に来ることはあり得ない。特にcは、どちらの基準でも可能な解釈が得られず、非文となる。

a 北海道で撮る写真を送る予定だ。

b 北海道で撮った写真を送る予定だ。

c *北海道で撮る写真を送った。

d 北海道で撮った写真を送った。

逆に<主節→従属節>という順序の事柄もでも、それに反する組み合わせは排除され、特にbは非文となる。

a 試合に出る選手たちは八幡宮に必勝祈願に行く予定だ。

b *試合に出た選手たちは八幡宮に必勝祈願に行く予定だ。

c 試合に出る選手たちは八幡宮に必勝祈願に行った。

d 試合に出た選手たちは（事前に）八幡宮に必勝祈願に行った。

これらは、「写真を撮る」と「試合に出る」と「必勝祈願に行く」とが、事柄間の意味関係においてこの順序しかあり得ないという例だが、時間や順序関係を表す副詞によってももちろん同じことが生じる。次は<従属節→主節>という順序である。

a テントを[借りる／借りた]人は、後で使用料を払うこと。

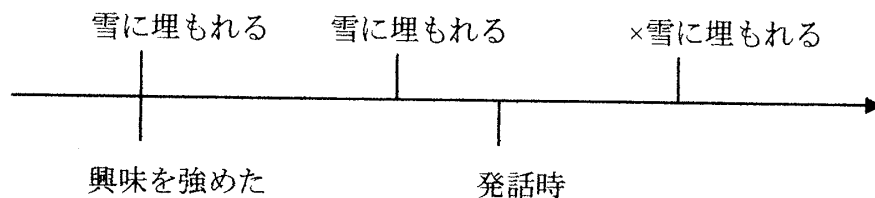
b テントを[*借りる／借りた]人は、後で使用料を払った。

筆者は川端康成が書いた『雪国』という小説で、何百の例文を探してきた。そのなかで多くのは<ル形－タ形>、<タ形－タ形>の組み合わせだということが気づいたのである。<ル形－ル形>、<タ形－ル形>の組み合わせは非常に少ないのは、文体の制限からかもしれない。

3.1 <ル形ータ形>

『雪国』から探してきた例文で、一番多くのは<ル形ータ形>という組み合わせである。2での結論によって、<ル形ータ形>の組み合わせでは、<主節時→発話時>という順序であるから、主節時及び主節時以降発話時以前の事柄は必ず主節時基準で表され、発話時及び発話時以降の事柄は発話時基準でも主節時基準でも表され得るのであるが、上に述べた制約を考え、小説のなかでの事柄間の意味関係において、連体節のル形の発生時間は発話時以降にあるはずがなく、或いは発話時以降に続けていくはずがないので、「発話時及び発話時以降の事柄」が排除され、これらの連体節のル形について、圧倒的なのは主節時基準と判定できると思う。つまり、連体節は主節時と同時、或いは主節時以降発話時以前の事柄である。例えば、

やがて雪に埋もれる鉄道信号所に、葉子という娘の弟がこの冬から勤めているのだと分ると、島村は一層彼女に興味を強めた。



このように、「雪に埋もれる」は発話時以降に発生する可能性がなく、主節と同時、或いは主節時以降発話時以前に発生するのは可能であり、連体節の時点は主節同時、或いは主節時以降、発話時以前にあるので、主節時基準をとるのである。以下も同じである。

窓の鏡に写る娘の輪郭のまわりを絶えず夕景色が動いているので、娘の顔も透明のように感じられた。

けれども、スチムの温みでガラスがすっかり水蒸気に濡れているから、指で拭くまでその鏡はなかったのだった。

選択もなく、さほどの理解もなく、宿屋の客間などでも小説本や雑誌を見つける限り、借りて読むという風であるらしかったが、彼女が思い出すままに挙げる新しい作家の名前など、島村の知らないのが少なかった。

小さい女の子から大きい女の子へ引っぱられる一筋の灰色の古毛糸も暖かく光っていた。

村の川岸、スキイ場、社など、ところどころに散らばる杉木立が黒々と目立ち出した。山麓のスキイ場を真横から南に見晴せる高みに、この部屋はあった。

それをとりとめなく読んでみると、この部屋から見晴らす国境の山々、その一つの頂近くは、美しい池沼を縫う小路で、一帯の湿地にいろんな高山植物が花咲き乱れ、夏ならば無心に赤蜻蛉が飛び、帽子や人の手や、また時には眼鏡の縁にさえとまるのどこか、都会の蜻蛉とは雲泥の差であると書いてあった。

それは杉林に続く丘の中腹で、窓の直ぐ下の畑には、大根、薩摩芋、葱、里芋など、平凡な野菜ながら朝の日を受けて、それぞれの葉の色のちがいが初めて見るような気持であ

った。

彼は昆虫どもの悶死するありさまを、つぶさに観察していた。

秋が冷えるにつれて、彼の部屋の畳の上で死んでゆく虫も日毎にあったのだ。

窓の金網にいつまでもとまっていると思うと、それは死んでいて、枯葉のように散ってゆく蛾もあった。

「君にはずいぶん度々会ったな。初めはあの人を介抱して帰る汽車のなかで、駅長に弟さんのことを頼んでたの、覚えてる？」

枯れ切った音のする戸の裾を抱き上げるように引いて、駒子は囁いた。

島村にまつわりついて来る駒子にも、なにか根の涼しさがあるようだった。(主節時と同時)

鈴の鳴りしきるあたりの遠くに鈴の音ほど小刻みに歩いて来る駒子の小さい足が、ふと島村に見えた。(主節時と同時)

家々の庇を長く張り出して、その端を支える柱が道路に立ち並んでいた。

橋の向うに暮れてゆく山はもう白かった。

「まあ。どうしよう。」と、駒子は番頭を追うように石段を下りた。後から下りて来る人々が駆け抜けて行った。

新しく燃え移ってゆく火と古い燃えかすに起きる火との中程に落ちたのだった。

幾年か前、島村がこの温泉場へ駒子に会いに来る汽車のなかで、葉子の顔のただなかに野山のともし火がともった時のさまをはっと思い出して、島村はまた胸が顫えた。

また、名詞を修飾する節が習慣や繰り返される出来事をあらわす時は、主文の述語がどんな時を表していても、修飾節の述語には現在形が使われるのが普通である。例えば、

毎日練習する人はすぐうまくなります。

つぎつぎにくる電車はどれも満員でした。

例文として、以下のものがある。

はるばる繻を買いに来る三都の呉服問屋の定宿さえあったし、...

小肥りの白い足にかかわらず、登山を好む島村は山を眺めながら歩くと放心状態となつて、知らぬうちに足が早まる。

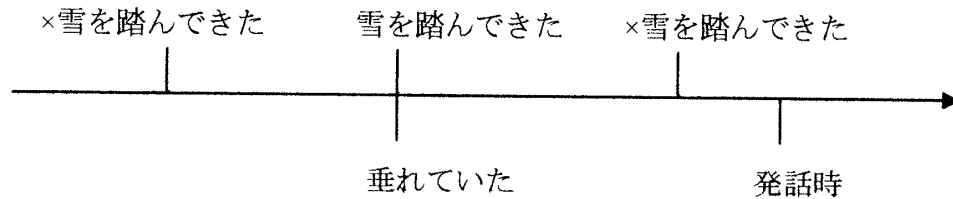
それに、「きらめいている」「さえずっている」のような動きの続いている状態や繰り返し続いているできごとを表す文、あるいは「遠ざかっていく」「ふえてくる」のような移動や変化の進行を表す文は、名詞を修飾するときそのままの形で使われることも多いが、文学作品などでは「スル」の形になることも多い。例えば、

.....とはいうものの、その日の漁の果てるころ、水平線上の夕雲の前を走る一艘の白い貨物船の陰を、若者はふしぎな感動を以って見た。(三島由紀夫 潮騒)

雪を積らせぬためであろう、湯槽から溢れる湯を俄づくりの溝で宿の壁沿いにめぐらせてあるが、玄関先では浅い泉水のように拡がっていた。(雪国)

3.2 <タ形ータ形>

明りをさげてゆっくり雪を踏んで来た男は、襟巻で鼻の上まで包み、耳に帽子の毛皮を垂れていた。



「雪を踏んできた」という動作は主節の「毛皮を垂れていた」以前に発生、或いは「毛皮を垂れていた」以降発話時以前に発生するのは不合理で、連体節は「毛皮を垂れていた」と同時なのである。結論によると、この連体節は発話時基準でも主節時基準でも表され得るのである。

やがて闇から現われて来た長い貨物列車が二人の姿を隠した。

これも上と同じように、「貨物列車が現れてきた」ということは、「二人の姿を隠した」の原因である、連体節の発生時間は主節時と同時であるから、基準時は発話時基準でも主節時基準でも表され得るのである。

同様に、

ここに新しく見つけた喜びは、目のあたり西洋人の踊を見ることが出来ないというところにあった。

この冬スキイ場でなじみになった男達が夕方山を越えて来たのに出会い、誘われるまま宿屋に寄ると、芸者を呼んで大騒ぎとなって、飲まされてしまったとのことだった。

日記の話よりも尚島村が意外の感に打たれたのは、彼女は十五六の頃から、読んだ小説を一々書き留めておき、そのための雑記帳がもう十冊にもなったということであった。

部屋に戻ってから、女は横にした首を軽く浮かして鬢を小指で持ち上げながら、「悲しいわ。」と、ただひとこと言っただけであった。

たわいなく空にされた頭のなかいっぱい、三味線の音が鳴り渡った。

来てみるといかにも、宿の部屋の軒端に吊るした装飾燈には、玉蜀黍色の大きい蛾が六七匹も吸いついていた。

窓際へ持ち出した鏡台には紅葉の山が写っていた。

手鞠歌の幼い早口で生き生きとはずんだ調子は、ついさっきの葉子など夢かと島村に思わせた。

薄く雪をつけた杉林は、その杉の一つ一つがくっきりと目立って、鋭く天を指しながら地の雪に立った。

深い雪の上に晒した白麻に朝日が照って、雪か布かが紅に染まるありさまを考えるだけでも、夏のよごれが取れそうだし、わが身をさらされるように気持よかった。

島村は雪の季節が近づく火鉢によりかかっていると、宿の主人が特に出してくれた京出来の古い鉄瓶で、やわらかい松風の音がしていた。

傾いた柱の根元が朽ちていたりした。

先祖代々雪に埋もれた鬱陶しい家のなかを覗いてゆくような気がした。

乗って来た自動車のわだちのあとが雪の上にはっきり残っていて、星明りに思いがけなく遠くまで見えた。

駒子の聞きちがえで、かえって女の体の底まで食い入った言葉を思うと、島村は未練に絞めつけられるようだったが、俄かに火事場の人声が聞えて来た。新しい火の手が火の子を噴き上げた。

火は映写機を据えた入口の方から出たらしく、繭倉の半ばほどはもう屋根も壁も焼け落ちていたが、柱や梁などの骨組はいぶりながら立っていた。

屋根を外れたポンプの水先が揺れて、水煙となって薄白いのも、天の河の光が映るかのようだった。

社員が一緒に選んで差し上げると、お客様の沈んだ表情は笑顔に変わっていった。

(『日本経済新聞』2006年5月18日)

しかし、

今朝山の雪を写した鏡のなかに駒子を見た時も、無論島村は夕暮の汽車の窓ガラスに写っていた娘を思い出したのだったのに、なぜそれを駒子に話さなかったのだろうか。

のなかで、時間を表す副詞「今朝」があるので、連体節の「山の雪を写した」はタ形を取るのは発話時基準である。

それに、

「今とっても朗らかに騒いでます酒のんで。」と、懷紙に酔った字で書いてあるだけだった。

という例文の中で、被修飾名詞「字」は「書く」の結果であり、連体節は「書いてあるだけだった」という主節以降、発話時以前に発生するので、この文は発話時基準とするのである。

3.3 <ル形ール形>と<タ形ール形>

論理的に言うと、小説で書かれた内容は全部過去のことであるべきが、ただし、それを現在形の形で表すことはないとは言えないである。これは、著者の視点が書かれた内容の発生する時点に立っているからだと思う。たとえば、

暮れるに先立って黒ずむ杉林の色にその姿を消されまいとあせっているもののように見える。

旅にまで出て急ぐ必要はさらさらない。

白縮は織りおろしてから晒し、色のある縮は糸につくったのを拐にかけて晒す。

時々、おくれて駆けつける村人があつて、肉親の名を呼びまわる。答える者があつて、喜んで叫び合う。

つまり、この時、発話時というものが見落とされると言える。修飾節の表すことがらが主節のあらわす時と同時であるから、修飾節の述語は現在形を使う。このような場合には、「ル形ール形」になるのである。

また、

男の足をつつんだ外套の裾が時々開いて垂れ下る。

島村は聞き覚えている、夜汽車の窓から雪のなかの駅長を呼んだ、あの葉子の声である。以上のように、修飾節の表すことがらが主節のあらわす時より以前であるから、修飾節の述語は過去形を使う。この時、「タ形ール形」になる。

3.1 で述べたルールによると、＜ル形ール形＞の組み合わせでは、＜発話時→主節時＞という順序であるから、発話時及び発話時以降主節時以前の事柄は必ず発話時基準で表され、主節時及び主節時以降の事柄は発話時基準でも主節時基準でも表され得る。

「実に真剣に、実に親切に、病人の世話をする娘さんが付き添ってたけど、あれ細君かね。」

は主人公の話であり、連体節の「病人の世話をする」は発話時と同時の事柄でも、主節時と同時の事柄でもありうるので、つまり、発話時と主節時のテンスは統一なので、この文は発話時基準でも主節時基準でも表され得る。

4 終わりに

動作性述語タイプの連体修飾節のテンスは、ル形は基準時以降・同時、タ形は基準時以前を表すが、ル形・タ形そのものとしては、どの基準時を取るかということは指定しないこと、ル形とタ形の組み合わせ、発話時と主節時の組み合わせで、論理的に自ずと表し得る範囲が決まること、現実には発話時基準が前面に出るか主節時が前面に出るかなど種々の要因によって決まるものであるということを論じた。

参考文献

- [1]金田一春彦 (1954) 「日本語動詞のテンスとアスペクト」, 『日本語動詞のアスペクト』, むぎ書房
- [2]寺村秀夫 (1971) 「従属節のテンス、アスペクト」, 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』, くろしお出版
- [3]井島正博 (1991) 「従属節におけるテンスとアスペクト」, 『東洋大学日本語研究』第四輯
- [4]寺村秀夫 (1992) 「連体修飾のシンタクスと意味」, 『寺村秀夫論文集Ⅰ』, くろしお出版
- [5]丹羽哲也 (2001) 「連体修飾節のテンスとアスペクト」, 『言語』12月号, 大修館
- [6]丹羽哲也 (1997) 「連体節のテンスについて」 『人文研究』第49巻第5分冊
- [7]砂川有里子 (1986) 『日本語文法セルフマスター する、した、している』
- [8]鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』, むぎ書房
- [9]久野暲 (1973) 『日本文法研究』, 大修館書店
- [10]鈴木重幸 (1979) 「現代日本語の動詞のテンス」, 『言語の研究』, むぎ書房

(平成20年3月31日受理)